

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04241

研究課題名(和文)日本の教育学における発達思想の史的検討

研究課題名(英文)A historical approach to the developmental thought in Japanese pedagogy

研究代表者

前田 晶子(MAEDA, Akiko)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：10347081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、発達論争(1934)の主要な論者である山下徳治(独スポーツ教育学)と波多野完治(仏心理学)を取り上げ、両者の発達思想の固有性を戦前・戦後の連続性の中で追うことを目的とした。山下徳治が戦後社会の身体論と文化論を踏まえ、子ども・青年の発達研究を「人間の自己形成・造形の発生論的研究」として成立させていった過程を明らかにした。後者の日本のフランス心理学受容については、フランスにおける心理学史の最前線を追い、波多野によって受容されたH.ワロンの発達理論の病理学的身体論の再検討の動向について明らかにした。また、研究のまとめとして、比較社会史研究の観点からの発達概念の視点について整理・分析した。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the developmental thought related to the Japanese pedagogical studies in post-war period. First of all, this study pointed out that, under the influence of German sport education, T. Yamashita discussed on the concept of development for childhood and adolescence as “the formation and expression of the Self”. Second, to analyze how French psychology brought the pathological and therapeutic point of view to Japanese developmental studies, we collected and examined the primary historical sources of H. Wallon and I. Meyerson. As a conclusion, the comparative socio-historical approach identifies that the developmental thought is formed through the dialogues with other studies such as medicine and sports.

研究分野：History of Education

キーワード：発達思想 山下徳治 スポーツ教育学 フランス心理学史 ワロン メイエルソン 波多野完治

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「日本の教育学における発達思想の史的検討 戦後教育学における「発育論争」(1934)の継承と転回」という主題のもと、日本における発達観・発達研究の学説史研究を行った。その研究の背景として、教育思想史研究における発達論批判、発達心理学における発達理論の再検討の動向、発達科学の新知見など近年の研究動向を踏まえたうえで、(1)日本の発達概念形成の比較学説史研究の必要性和、(2)発達研究の周辺領域としての医療とスポーツへの注目の2点について、研究を進める上での本研究固有の観点とした。

2. 研究の目的

本研究は、戦後教育学が戦前期の発達研究をどのように継承し、発達概念を教育学の中心的概念として定位させたかを検証することを目的として実施した。本研究の特徴は、現在批判の俎上に挙げられている戦後教育学における発達概念について、戦前期の発育論争(1934)の関係者による発達研究の戦後における追究過程を軸として歴史的に検証する点にある。具体的には、山下徳治、波多野完治らの戦中-戦後の仕事を連続して追うと同時に、双方の思想形成の基盤となったフランス心理学とドイツ・スポーツ教育学の日本における受容過程を明らかにすることであった。これらの検討を通じて、現代社会を生きる子どもの成長・発達を支えるための人間形成の新しい枠組みについて歴史研究を通して提供することを目的とした。また、さらに、歴史研究を通して、子どもの発達を漸次に進展する安定的なものとする従来の発達観に対して、病理学的な発達観に着目することで、多様で不確実さを含んだ発達像を構想し、その上で、教育、医療、福祉をまたいで人が生涯を通して自己を造形していくという新たな人間形成概念を導くことを目指した。

3. 研究の方法

(1)ドイツ・スポーツ教育学と日本の発達研究：山下徳治を中心に

1934年の「発育論争」を主催した山下徳治については、戦中-戦後の動向(新興教育研究運動以降の展開)を主たる対象として、青少年論(スポーツ教育論)、日本民族論、進化心理学論などに着目して一次史料を用いながら考察した。特に、スポーツ教育の領域において、1955年に来日したケルン体育大学の初代学長であったC.ディームと

の親交に焦点を当て、両者の間で交わされた書簡類を通して相互の影響を考察した。さらに、ディーム文書をもつケルン体育大学への現地調査を実施して史料を入手すると同時に、ディーム研究者との交流を通して研究課題の検討を行った。

山下徳治文書(成城学園教育研究所と鹿児島大学にそれぞれ所蔵している)は、未整理のままおかれているものもあり、文献学的な調査と整理を行い、全体の目録を公表した。史料分析を通して、山下が戦前に追求した発達研究がどのように戦後の身体教育の取り組みに展開したのか、また彼の思想がスポーツ少年団の経営にどのように反映されたのか、スポーツ少年団と学校体育との関係について焦点化して研究を進めた。

(2)フランス心理学・発達研究の日本への影響：波多野完治を中心に

フランス心理学史における発達研究について、P.ジャネやH.ワロンを中心に日本での翻訳状況を調査し、日本におけるフランスの発達研究受容の特徴について分析を行い、また、そこでの波多野完治の役割について整理することとした。

同時に、フランス本国における心理学史研究の状況について検討を行い、日本に影響を与えた心理学者H.ワロンやI.メイエルソン研究のレビューを行った。

波多野完治著作集等とフランス心理学文献が中心的な検討対象となるが、後者については、翻訳されたものだけでなく、フランス国会図書館を中心に、パリ大学図書館やフランス国立障害者教育・指導方法高等研究所(INS HEA)図書館などに所蔵されている1910-30年代の一次史料にもあたり、フランス心理学の発達研究における病理学的観点の固有性についても検討を行った。

(3)比較社会史研究の観点からの発達概念と周辺概念の整理

研究のまとめとして、発達概念の比較社会史研究に向けての示唆を行った。特に、「不確実性 uncertainty」「危険 risk」「危機 crisis」など病理学的概念と発達・成長概念の布置関係を手がかりとしてとして整理し、そこから導き出される発達観の特徴を考察した。

4. 研究成果

本研究の成果は、初年度には中間報告書「山下(森)徳治における発育論の形成-

戦前の教育運動から戦後のスポーツ教育論まで」(2016年3月、総頁数118頁)を、最終年度には報告書「日本の教育学における発達思想の史的検討」(2018年3月、総頁数72頁)を刊行して示した。

(1) 中間報告書

初年度の報告書については、「近代化に邁進しつつあった1930-40年代の世界において、いかに人間発達思想の学説史・実践史・運動史が展開したかを明らかにすること」を課題として、山下徳治のモノグラフをまとめた。

「第一部 山下徳治における発生論の形成」では、彼の形成史を踏まえた上で、学問的・実践的な思索の展開と、新興教育運動や教育科学運動との関わりなど、戦前期の動向を対象として分析している。山下徳治研究の軸を成すものとして「発生論」をキーワードとして抽出し、彼の発達思想の特徴を示した。

さらに、戦後の山下の発達思想について、スポーツ教育という領域での深化を分析した。それが「第二部 山下(森)徳治のスポーツ教育思想」である。彼の戦後史については、研究の蓄積は僅かであるが、少年とスポーツの関係において「自ら生立つ子ども」=人間造形論を展開しているところが注目される。また、そのスポーツ教育論が、独ケルン・スポーツ大学初代学長であったカール・ディームとの共鳴関係において成し遂げられたところに世界的な意味があったと指摘した。

「第三部 山下(森)徳治文書の全貌」では、東京・世田谷と鹿児島に分かれて所蔵されている山下(森)徳治文書の全体像をリストとして明らかにした。

併せて、山下研究の中心概念である人間の「自己造形論」に関わって、教育学における鍵概念として位置づけるための検討の一環として、坂元忠芳「変革の教育学」を翻刻し、解説を加えて、最終年度に製本を行った。

(2) 最終報告書

最終報告書では、日本の発達思想の形成史において、学問の間、また日本と西洋の間において「どのような対話があったのか」という観点から研究成果を提示した。

第一章では、1930年代の「児童学」をめぐる論議を子どもの「からだ」をめぐる問題としてとらえ、山下徳治を中心に、広く児童学-教育学-治療学の接点において展開

された議論を追っている。

第二章は、戦後の山下徳治の民族文化論を取り上げたが、彼が近代教育を転換するためにスポーツや芸術、そして民族文化論の領域で「造形」概念を磨いたことに注目したものである。

第三章は、同じく戦後において山下徳治が中心的に取り組んだスポーツ少年団の設立との関わりで、ケルンスポーツ大学のカール・ディームとの親交を深めたことに着目し、両者の書簡の分析を行っている。

いずれも、戦前から戦後へと大きく社会動態が変化する中で、従来の教育学の枠組みが再検討される中で取り組まれた「対話」であったと位置づけられる。その中では、発達思想が「からだ」と「文化」という観点で問い返されようとした点も浮かび上がってきている。

また、補論として、フランス心理学史に関わる近年の研究動向について論じた。本研究の二つ目の課題である日本の発達研究におけるフランス心理学のインパクトについては、研究二年目に研究代表者がフランスにおける在外研究を行ったため、日本の受容過程よりも、1910-30年代のフランス心理学史の研究として作業を進め、とりわけH.ワロンとI.メイエルソンの発達研究について一次史料に基づいて分析を行った。

本研究では、全体として、一次資料に基づく基礎的な作業を行ってきた。今後は、基礎作業から学説史研究の枠組みを提出すべく、議論を重ねていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

(1) 前田晶子「フランス国立公文書館ピエールフィット=シュル=セーヌ館におけるアンリ・ワロン研究集会のこと」『日仏教育学会年報』23号、査読無、2017年3月30日、pp.77-80

(2) 前田晶子「教育の社会史が教育原論をどう豊かにしたのか」『<教育と社会>研究』第27号、2017年9月、査読無、pp.7-17

(3) 前田晶子・金智恩「山下(森)徳治文書」『成城学園百年史紀要』第2号、査読無、2016年3月、pp.104-120、担当部分抽出不可能)

(4) 前田晶子「新興教育運動と学制改革論-山下徳治における発生論の形成(5)-」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第 67 巻、査読無、2016 年 3 月、pp.101-112
https://ir.kagoshima-u.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13290&item_no=1&page_id=13&block_id=21

(5) 武隈晃「スポーツ組織の理念にみるスポーツ教育思想の形成過程：森(山下)徳治とカール・ディームの共鳴関係」『鹿児島大学教育実践研究紀要』第 25 巻、査読無、2016 年 3 月、pp.71-761
https://ir.kagoshima-u.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13343&item_no=1&page_id=13&block_id=21

〔学会発表〕(計 1 件)

(1)武隈晃「体育・スポーツ経営におけるフィロソフィの重要性を問う」シンポジウム指定討論者、日本体育・スポーツ経営学会、2017 年

〔図書〕(計 1 件)

(1)前田晶子「発達概念の歴史研究」渡部昭男・中村隆一編著『人間発達研究の創出と展開』群青社、査読無、2016 年、pp.233-245 (総頁 275 頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

前田 晶子 (MAEDA Akiko)
鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授
研究者番号：10347081

(2)研究分担者

武隈 晃 (TAKEKUMA Akira)
鹿児島大学・法文教育学域教育学系・教授
研究者番号：90171628

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし